

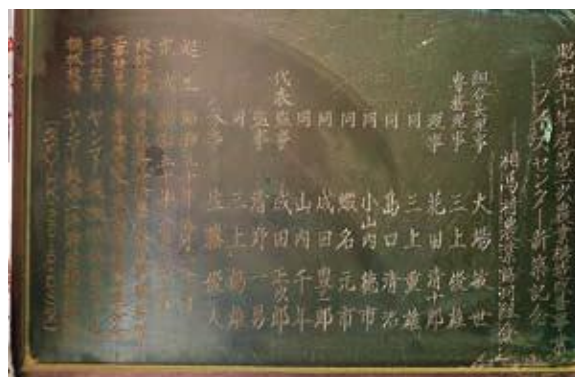
ライスセンターの歴史を振り返る



46年間支え続けてきたライスセンター



ライスセンター最後の稼働が始まる



ライスセンター新築記念に当時飾られたもの



かつて主流であった棒架での籾の乾燥

ライスセンターと取り巻く情勢の歴史
 昭和50年、9月に設立されたライスセンターは第二次構造事業の地域施設として、総事業費1億9096万円を投じて、稲作農家の集団に対して稲刈りから調整までの一貫作業を可能とするために新設された。当時は、大部分がバインダーによる刈取りと棒架による自然乾燥を行っており、乾燥の為の作業行程が多く、当地区のりんご栽培と労力がかちあうことから、刈取りから脱穀までの期間短縮はコンバイン導入とライスセンター建設以外には解決の方法がなかった。

そして、ライスセンター建設と同時にコンバイン17台と翌年51年に7台で計24台を導入し、近代化の道を歩むこととなった。

しかし、建設した年には7月中旬までの低温による分けつ不足やいもち病の激発、8月20日の集中豪雨により被害面積は51haに及び、減収と品質低下を引き起こした。さらに、ライスセンターでは高水分でかつ集中的に生籾が入庫される為、作業は夜の11時から12時までかかっていた。また、処理能力も当初予想の70%にとどまった為、53年に補完工事を施工し、全国で初めてライスセンターにグリーンサイロを併設した。補完工事により荷受け規制が緩和され、適期刈取り、適正な乾燥、籾摺りが可能となり、米質向上へつながった。

これと同時に、昭和53年には組合員の努力と適正な指導により全量一等米生産を初めて行うことが出来た。
 当初計画では目標総収量の1万5000俵であったことに対して実際には1万7078俵と、目標実績比約113%にも及んだ。



当時ライスセンターに全国で初めて建てられた約300t貯留できるグリーンサイロ

しかし、その後経済発展と共に食の多様化が進み、米の需要が減った事と、機械化による大規模化で生産過剰が続いたことで米価は年々下落し、水田から果樹への転換を余儀なくされた農家も少なくなかった。

平成11年、村内の11の稲作生産組合はオペレーター不足や機械の更新費用等により継続が難しいことから、組織を一本化し、「ライスマンクラブ」を発足。一つの行政区画を一つの組織で一本化したことは当時では全国的に珍しく、画期的な経営体系となった。

その後も、米の取扱量は減ったものの、平成28年産からスタートした特A米「青天の霹靂」の生産は、青森生まれのブランド米として高単価で販売され、昨今のコロナ禍の影響をさほど受けずに農家の手取り向上を後押ししている。

より良い作業に向けて

近年稼働しているライスセンターは建物および粉摺、乾燥機などのプラント施設の老朽化が進み、毎年多額の保守修繕費がかさむとともに、出荷前の均一した品質維持にも支障を及ぼしている。今後、相馬村地区の安心・安全なブランド米を維持する為に6億7100万円をかけ、全面更新を決めた。

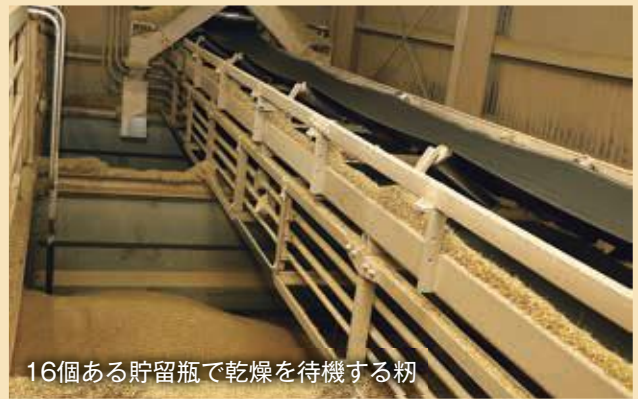
今年産のライスセンター作業終了後すぐに解体に向けて動き始め、令和4年産米の刈取り前の完成を目指す。

今後、新ライスセンター建設により、安心、安全な品質の向上と、ライスマンクラブをはじめとする地域の稲作農家の意思を継承し、リンゴ栽培にも更に力を注げることが出来るように、努力して参ります。

～46年間の思い出が詰まった機械～



中枢操作が可能な操作盤



16個ある貯留瓶で乾燥を待機する粳



現在も現役で動いている大型掃除機



年季の入った切り替えワイヤーが並ぶ